
リンゴを求めて

みゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リンゴを求めて

【Nコード】

N5735X

【作者名】

みゆう

【あらすじ】

異世界で助けてくれたのは、旅の料理人たち。しかし彼女達はグルメ界で悪名高いフォンタイル・アカデミー元料理部メンバーだった。凶悪な美少女達に翻弄されながらも、世界の平和のため暗黒レシピ集普及を阻止する話。

第1話 始まりは暗黒料理（前書き）

> i 3 3 4 3 6 | 2 5 2 5 <

第1話 始まりは暗黒料理

幸運と引き換えに運命を歪めてしまう厄介な俺の固有スキル【悪運】。

そんなものにも今では感謝している。

今になってようやく思い出せるようになったあの日の出来事から俺の旅路をここに綴ろう――――

> i 3 3 4 7 6 — 2 5 2 5 <

「喰うかい？」

そう言って紅い髪の小柄な少女に差し出されたのは、枝に刺さったネズミの丸焼き“らしき”物体。“らしき”という言葉は決して「ネズミ」の方に掛っているわけではない。目の前の悲惨な物体がネズミかどうかなどは些細な問題だ。

これは「丸焼き」なのか？

丸焼きというにはあまりにも……黒い。黒過ぎる。ただ焦げているというだけではない。気のせいか周りに黒い煙、むしろ食材となった命の怨差が纏わり憑いている気がする。そりゃ恨むだろうな。死んだ挙句にゲテモノ料理と化しちゃ報われない。自然の理、命の冒涇だ。だがこれが仮にゲボマズ料理だとしても漢としては美少女3人の手料理を口にしないわけはいかない。

そんな漢としての矜持と、視界に映る惨事の間で葛藤していたが、当の彼女たちは平然と談笑しながら食べており、銀髪の少女と俺にソレを差し出した紅い髪の少女は既に二匹目に齧り付いている。

意外と大丈夫なのかもしれないな。

そう判断してまずは一口、キャラメル一個分くらいの量を口に含んだ。本当に気持ち程度だ。しかしそれでもだ。この量なら大丈夫だと判断した俺の見込みは甘かった。砂糖がきらめくクイニーマンにアカシアの蜂蜜を瓶ごとぶっ掛けるよりも甘すぎた。

そいつは只のゲテモノ料理なんてもんじゃない。

黒炭のようになるまで焦げた苦味、抜けてない血と取れない獣臭さ、明らかに用途を間違っている香草のブレンド、表面の焦げたガチガチ感と、半生ですらなく、生々なままの内側の肉の奏でる不協和音——解析するほどに精神崩壊を起こしそうなその料理とも呼べない“何か”は 全ての点において破滅的で壊滅的だった。

即座に吐き出せばよかったものの、あまりのショックで吐き出す

ことはおろか飲みこむことすらできず、気を失う瞬間に目を強制的に覚まされるほどの不味さ。

HPバーが目には俺の眼に見えるのならば今頃赤く点滅しながら1という絶望的な数値を叩き出しているだろう。しかも毒でも麻痺状態でもなさそうな生殺しである。

文字どおり死にかけの魚のような目で俺は、毒殺を謀ろうとした張本人たちの方を見る。

信じられない。

何で彼女たちはそれを平然と食べていられる？　そしてあの金髪は今なんて言った？

「いつもより良くできてるね」……だど。ふざけるな。

この娘等、正気じゃない。一体どういう味覚と食生活をして来ているんだ。

そんなことを考えながら何度もKOと覚醒のループを繰り返し、とうとう俺の意識は——完全に墜ちた。

そして後に、この日に人生を狂わせた元凶を俺は知ることになる。

固有スキル【暗黒料理】

…どのような食材も調理すると一定の確率で【暗黒料理】が完成する。なおこのスキルによって作成された【暗黒料理】は麻痺・猛毒・火傷・暗闇をはじめとする各種パラメータ異常、HPダメージ、MPダメージ、ステータス増減などを引き起こす。

まさに呪いとも天災とも呼べる凶悪スキルを彼女たち3人全員が取得しているという悪夢のような状態だったのだ。そして俺が食したのは

《暗黒料理》ヨーグリアネズミの冥界焼き

…HP小回復。耐毒性が低い者に対しHPダメージと、稀に記憶障害をもたらす。

そうなのだ。俺はこの時に多くの記憶を失ってしまった。あまりにも下らない事の顛末。だがそのおかげで今の俺は新しい仲間たちと新しい人生を歩むことができるようになった。

【主人公補正】持ちの我らが姫の竜騎士をリーダーに、流暢な肉体言語を操るエルフ娘と、異なる理を持つ猫耳ハンター娘という攻撃力過多な美少女3人のパーティ。

そこに旅の料理人として加わることで“新しい俺”の人生は再スタートした。

第1話 始まりは暗黒料理（後書き）

ネギま二次創作をしている者ですが、完全オリジナルをやってみたくて投稿しました。異世界ファンタジーです。できれば1か月3回ほどの更新ペースで頑張りたいです。初めての完全オリジナルということで、原作のネームバリューなしでの評価はどんなものだろうかとドキドキの私です。本業絵師ですので挿絵をどんどん入れていくと思っています。最初なので短めですが感想お待ちします。

第2話 加害者たちの焦想 (前書き)

更新遅れました。今度は主人公以外からの視点。まだ主人公の物語は始まってません。

第2話 加害者たちの焦想

“彼”が眠ってから30分。完全に日が暮れた森の中、少し開けた土地で火の番をしながら、横に並んだ3人の少女は今後について話し合っていた。

「よっぽど疲れとったんねえ」

銀髪の彼女は体育座りの姿勢から上半身だけ振り返って、丸太の上で横にされている“彼”に毛布をかけ直す。

「何、ミイは“そういうの”が好みなの？ 意外ね」

「な、なんば、エリスは言いよっと！ 勘違いせんでよアンナ。違うけんね。さっきのに深い意味はなかとよ」

ミイと呼ばれた少女は必死に手を振って否定する。雪原のように白く澄んだ肌が、若干紅くなっているように見えるのは、闇夜に揺らめく焚火のせいだけではないだろう。

「そういうところがイチイチ可愛いのよ。からかってみただけよ。ゴメン」

エリスと呼ばれた金髪の少女は意地悪く笑う。遊ばれていたとわかってはいても納得できていないであろうミイは目を細めて頬を膨らます素振りをする。

「それにしても完全に眠っちまってるなあ。飯喰ってから色々聞こうと思ってたのに。結局さ、まだ名前さえも聞けてないや。でもど

う見ても、この兄ちゃんの魔族で訳ありだよな」

楊枝を食みながら赤髪の少女は疑問を呈する。成り行きでどうかしようとしていたらしい彼女にとって、本人との意思疎通ができない現状が多少苛立たいようだ。

「逃げて来たとかじゃなさそうよ。彼、少し汚れているけどスーツも靴も上物よ。どこかの貴族かもしれないわ。それにアンナは彼の左腕を見た？」

エリスに言われて、赤髪の少女――アンナは彼の左腕を確認する。

「多分これ、ブレスレット式の時計か？　すごいな。こんな小さな時計はアタシ初めて見た。これマヤルーサの時計塔より凄いいんじゃない？　ねえ？」

「こらっ！　止めなさい。ゼンマイ仕掛けは壊れやすいのよ。そんな風に突いて壊したらどうするのよ。これだけのもの、多分弁償なんてできないわよ。アンナの村だけじゃなくて私の家も搾り取られるかもしれないわ」

「家出中なのに心配するんだな」

「当然でしょ。だって私が帰る所はそこしかないもの。今は居場所がないだけで……」

「な、何かごめんな。エリス」

気まずい沈黙が2人の間に流れる。火に寄って来る虫の羽音と、薪木のはじける小さな音だけが流れる。そんな中、後ろでミイが彼に向って何かをしている音に2人は気がついた。

毛布の剥がされる音、まるでネクタイを外されて服を脱がされているようなシーンを想像してしまうような衣類の擦れる生々しい音、そして先ほどより少しだけ不規則に乱れる“彼”の呼吸。

———こんな気まずい空気の中で、ミイは一体何を!?

同じ考えに至り、固唾を呑む2人。アイコンタクトを取ると同時に振り返る。

振り返ればそこには予想通りの風景。

彼はネクタイを外され、無防備にも白いシャツから少し鍛えられた胸筋と腹筋が覗いており、胸の真ん中ほどにミイは右手を当てていた。

「早まるなミイ！」

「私たちが気まずくなくなつてるときに発情するんじゃないわよ。田舎娘！」

2人の焦りも虚しく、帰つて来た返事は気の抜けたものであった。

「へ？ スキャンしとっただけばい」

そう言つて胸に当てていた右手に握られていたもの、銀色に輝くランプ大のプレートを見せる。

「心配して損した」

「期待して損した」

胸を撫でおろすアンナと、肩をすくめるエリス。本当なら一言言い返してやりたい気持ちがあったが、それよりも重要な事実を彼女は告げる。

「こん人、魔人族じゃなかばい」

深刻そうに告げる彼女に対しての反応は実にあっけない物であった。

「はあ。魔人じゃないってのは意外だけど別に種族とかどうでもいいじゃん。アタシら保守派でもないわけだし。それよりさあ。そもそものこういうのって、賞金首以外、本人の許可なしに調べていいのか？」

「アンナ、今回は仕方ないでしょ。私たちは今の事態の危険度を認

識するべきだわ。ミイは正しい。直接本人に聞こうにも寝てるし。そもそも【主人公補正】だっていつもいい方向だけに作用するとは限らないのよ？　トラブル引っ張って来るってことも自覚しときなさい」

「わかった。悪い人には見えないけど、何かあるのは間違いないもんな。こういうのアタシは苦手だから2人に任せるよ。で、どんな感じなんだ？」

ミイの持っているプレートを受け取って、3人はそれを覗き込む。

「見たほうが早かよ」

「どれ？」

「私にも見せて」

プレートの上には黒い文字で

名前…不明

年齢…24

種族…不明

と表示されていた。

「うん。見事に『不明』ってしか書いてないな」

「でも魔族じゃないって証明にもならないわね」

「それより下ばい。問題は」

職業..商人

総合レベル5

HP..2／11

MP..17／17

筋力..8

体力..10

器用..36

敏捷..8

幸運..4

「総合レベルが低いんだろうけど……器用がおかしいな」

「私の倍どころか、レベル9の狩人のミイ並みって何なのよ?」

「おい。それよりスキルを見ろよ」

常時スキル..【悪運】レベル4

戦闘スキル..短刀レベル7

鈍器レベル1

逃走レベル1

不屈レベル2

生活スキル..商売レベル4

料理レベル21

農業レベル4

祈祷レベル5

解体レベル5

発明 レベル3
鑑定 レベル3

「酷いわね」

「酷かね」

「すげえ。料理スキルが21って、そこらの店より上手いよな？」

2人は予想外の事態に顔をしかめるが、逆にアンナは嬉々として話しかける。

「レベル15超えたらライセンス認定だから、それなりの腕かしら。って、そんなスキルは後回しよ。それよりこれよ！ 【悪運】 って書いてあるわよ。 【不運】 の次に不味い、運命改変スキルじゃない」

明らかに青ざめた顔でエリスはノリツツコミを入れる。だがもつと不味い情報に気が付いたミイが告げた。

「良く見たら状態ステータス欄に、『記憶喪失』 ってあるけど『記憶封印』 じゃなかごたっね」

「マジで？」

「嘘でしょ？」

「なあエリス、『記憶封印』 じゃなくて『記憶喪失』 にする呪文ってあったっけ？」

「ないわ。少なくとも、メジャーな魔法じゃない。それに話していた時は警戒されてほとんど話さなかったけど、記憶がなかったという雰囲気じゃなかったと思うわ」

「あたしもそう思うんだよなあ。まさかだけど、今日の冥界焼きの刺激が強すぎて記憶も飛んじやった、とか？」

「「それだ!!!!」」

2人は顔を合わせると一呼吸を置いた後、綺麗にハモって叫び、すぐさま遠火に置かれている串焼きにプレートを当てた。

結果は凶星。

《暗黒料理》ヨーグリアネズミの冥界焼き

..HP小回復。耐毒性が低い者に対しHPダメージと、稀に記憶障害をもたらす。

「————私たちのせいだったのね。普段から【暗黒料理】を食べ過ぎて耐毒性がついてるから調べもしなかったもの。迂闊だったわ。

「それで、目覚めたらどきゃんすつと？」

「流石にこの兄ちゃんを放つとくわけにはいかなかったな」

「記憶障害の程度にもよるけど、素性の知れない魔人がうろうろしてたら目立つし、もし彼が調べられたら私たちも終わるわよね」

このままなら犯罪者コースへ一直線の3人。

そしてそれぞれ思い至る。それならいっそのこと彼のことを――

「――雇うか」

「――攫うか」

「――
匿
う
か」

第2話 加害者たちの焦想 (後書き)

最初から負い目感じまくりのヒロインたちです。問題ありな3人ですが、彼女たちの本性は少しずつ晒します。ちなみにハーレムにはなりそうにないです。

その他おいしいところは主人公よりも、【主人公補正】持ちのアナに持って行かれそうです。

時間があれば挿し絵を描きたいですね。オリジナルは初めてということで手探りの状態ですので、いろんな感想待ってます。

第3話 被害者の困惑（前書き）

お待たせしました。この連載は短めの量で続けていくつもりだったので、1つの話が長くなったので3話に区切って連続更新です。

第3話 被害者の困惑

妙な胸やけと疲労感で眠りから覚める。

瞼を開く僅かな体力消費と夕飯を食べ損ねた空腹感がせめぎ合うが、結局は惰性に負けて夜食を諦めた。

しんどい。

仰向けの体勢から、左半身が下になるように寝がえりを打とうとすると、腰の辺りに痛いような、むず痒いような気持ち悪さを感じる。

フローリングで寝てたのか俺。せめてソファで寝とけよ、と自分のだらしなさに呆れつつも、胸元の毛布を頭の天まで被るように引き上げた。毛布を右頬に寄せて柔らかな感触を確かめようとするが、触り心地に違和感を覚える。薄い、そして堅い。それから人肌のように心地よいはずの起毛のしっとり感はどこへやら、僅かに鼻に付くのは自分以外の汗とカビの臭い。

おかしい。

左頬に感じるのはガサガサとした木の皮のような触り心地。頬ずりするとめくれた木の皮が1ミリほど刺さった。垂れ下った左手に感じるのは間違いなく木の皮の感触だ。

フローリングじゃない。俺の部屋でもない。なら、ここはどこだ？

まどろみへの誘惑を振り払って毛布を取り払い、体を起こす。薄

雲を淡く染める紅い光が、木々の間から照らしているのが目に映る。そして下に目を向けると自分が寝ていたのは、巨大な丸太の上だということが分かった。

寝ぼけているのか俺は？

「ふああああ」

寝ぼけた頭を再起動するべく両手を伸ばしながらあくびをして、冷たい空気を存分に取り入れてみる。都会暮らしに慣れてきたためか、新鮮な空気を旨いと感じる。肺の中を満たす木々の香りがここは森だと言うことを改めて認識させた。

明らかに俺の住んでいる街じゃない。夜中にどっかのキャンプ場にでも突撃したとでもいうのか？

「おはよう。よく眠れたかい？」

ふと、背後で声がして振り向くと、なんとそこには紅い髪のポニーテールに角を付け、ゲームでよくある冒険者の着るようなマント姿のコスプレをした美少女がいた。背は150cmもないであろうその少女は、なんと2mほどもある金属製の槍を左手に携えていた。

「カッコいい」

思わず心の声を口に出してしまった。ほんの1秒ほどだが見惚れてしまっていた。彼女の瞳の琥珀は自分の心を吸いこんでしまいうなほど深い色をしていた。

はっ、ちょっと待てよ俺。知らぬ場所でききなり出会った見知ら

ぬ少女に対し何を言っているのかと焦る。俺はこんなところで彼女にこんな格好をさせてナニをしていたんだ!!？

ここ数年すっかりご無沙汰とはいえ、流石に中学生に手を出すほど人間として落ちぶれてはいない。

どうするべきだ？　まずは携帯で誰かと連絡をとって……

そう思ってポケットを漁るがそういえば鞆に突っ込んだままだった。代わりに皺くちゃになったスーツの右ポケットから二つ折りの財布の存在を確認してを取り出す。中身を確認すると1万3000円ほど残っていた。中身の無事を確認して安心する。どこまで行ったのかわからないがとりあえず1万ほど渡しておくべきなのかと思い、札を取り出そうとする。

「って何を俺は最低なこと考えてんだあ！」

左手で自分の顔を殴りつける。20cm程度の近距離からの一発とはいえ、自分で殴ったことを後悔する程度の鈍い衝撃が頬骨を中心にして伝わる。確かに感じる痛みは喝を入れるとともに、これが夢ではないのだと教えてくれた。

「大丈夫か？　混乱しているのか」

心配そうな顔をした目の前の少女は背伸びをしながら、ほんのり腫れた頬に向かって右手を伸ばす。目が合う。背丈が30cmほど違うとはいえ近い。こうも年下の少女に触れられると罪悪感に近いドギマギした感情が溢れて来る。

大丈夫、そう口にしようと思った矢先。

「私のアンナに何するのよ！」

いきなりドスの利いた女の声がした次の瞬間。

「プリンセス チョークスリーパー！！！」

振り返える暇もなく背後から怪力で首を絞められる。期間を圧迫され声を出すことはおろか、息をすることさえできない。必死に右手で絞める手に向かって降伏のサインを必死で連打するが、拘束がますます強くなっている気がする。

死んだかな、俺。ここまで「助からない」と直感的に感じたのは人生でも2度目かもしれないな。あれ、1度死にかかったことあったっけ？

そんな疑問を抱きつつも、意識は遠ざかっていき、もう右手すら動かせない。だが柔らかい何かが肩のあたりにあたっている気がする。酸素を断たれた哀れな脳が最期にいい夢を見せてくれているに違いない。このまま死ねるのならいいや————

急に喉仏の圧迫感がなくなり、酸素が戻って来た。膝から崩れ落

ち呼吸を整える。振り返るとうつ伏せに崩れ落ちた金髪少女の姿。指先が痙攣した実験台のカエルの足のように痙攣している。そしてその後ろから、左手に麻袋と右手に笛のような筒を携えた銀髪の少女がやってきた。

「こら、何で助けんとね」

「何でって、例の【悪運】を見れるかなって思ったんだけど。ナイスタイミンだな、ミイ」

まるで他人事のように言う紅い髪の彼女を見上げる。たった3秒ほどの間とはいえ生死の間を彷徨っていた自分を放置プレイしていた彼女に、恨みごとの一言でも言ってやりたかった。しかし「ゴメン」と手を合わせて苦笑いされると何故かそういう氣を失くしてしまう。

「いいところで邪魔をしてくれたわね。あと少しでアイツの関節を極めて極めて極め抜いて肉骨粉にしてやったのに」

「また耐性上がったんね、ダボイノシシ3頭分の致死量は使っただよ？」

そう言いながら、彼女は倒れている少女の首元に手を伸ばす。その手に握られていたのは手芸用の倍ぐらいのサイズの太めの針だった。会話と手に持っている物から判断して毒を盛った吹き矢で自分を助けてもらったらしいことは理解できた。

それともう1つ、そのイノシシとやらの致死量の何倍というのは理解できなくとも、弱っているはずの状態でさえも右足首を大の大人の握力で掴んでいる足下の少女は、少なくともプロレスラーよりも凶悪な存在だということは身をもって知った。が、それよりも気になるのは

「ね、猫耳!!?」

癖っ毛気味の銀の長髪の上部から飛び出ている耳を凝視していたら思わず口に出してしまった。三角形型の耳の中には髪の毛とは違う羽毛のような耳毛、どうみても猫耳としか言いようがない。先ほどの紅髪の少女の角は無機質地味でいて作り物のように思えたが、この耳は本物の動物のように動いている。

先ほどまでは酒の勢いで間違いを犯した可能性を僅かながら考えていたが、ここまで本物らしき猫耳を見て、考えたくもない可能性に行きあたる。先ほどのチョークスリーパーの痛みは本物だ。夢でもない。まさか、これはファンタジーな世界に飛ばされたという奴なのだろうか。

「ねこみみ?」

首を傾げる仕草はまるで小動物の愛らしさそのもので、カールした毛先が生き物のように揺れた。そして細かく上下運動する耳が作り物でないことを嫌でも実感させる。

「顔色が悪かよ。これ食べれる?」

彼女は手のひらに収まるサイズの瓜のような果実を袋から取り出して差し出す。が、どうしてだろうか、何故か歯が震えだし、その受け取りを本能が拒否しているのを理解する。ファンタジーな世界かもしれない食べ物だからだろうか、口の中がカラカラで固唾をのむことさえできない。

「今度は大丈夫だって、ミイの採って来たものに間違いないから。」

食べてみなよ」

紅い髪の少女は出された果実を奪い取り、口元に無理やり押し付けた。仕方なく一口齧ると、ある程度見た目通り、薄皮で堅めの果肉の水っぽいメロンのような味だった。こう表現するとあまりおいしそうではないように聞こえる。しかしメロンとして考えれば甘味に欠けるだけであり、歯ごたえのある触感と芳醇な香りが食欲をそそった。忘れていたようだが、どうやら空腹だったらしく、もう一口齧って応える。

「美味しいなコレ」

「だろ？」

「良かった。リリケットの实ならまだあるけんね」

2人の少女は笑顔を見せた。足元の少女の殺氣らしいものと、足首への圧迫感が増した気がするが気にしないことにする。

「随分採れたみたいじゃん。早く朝飯にしようぜ。自己紹介がてら、な？」

足元の少女に肩を貸すようにして持ちあげた小柄な彼女は、丸太の方へ眼をやり促した。

第3話 被害者の困惑（後書き）

脳筋エルフ娘の設定で進めていたら、大魔法峠の田中ぶに絵閣下の
ような状態になってしまったので潔く諦めて技もマンマ使わせて頂
かせました。オリジナルとしては問題ありすぎなんです、どうし
てもそのイメージから離れられませんでした。

第4話 リンゴを巡って（前書き）

やっと自己紹介。長かった。

第4話 リンゴを巡って

焚火跡を囲むようにして座る4人。先ほどの果実を朝食用に3個ずつ渡されていた。

「で、兄ちゃん。単刀直入に聞くけどアンタ一体何者だい？ 昨晚森の中で倒れてたから介抱してたけど、その格好からして冒険者ではないんだろ？」

「何者って俺が聞きたいところだよ。まあいいや、よく状況が自分でも飲み込めてないけど俺が君たちに助けられたのは確からしいな。とりあえずありがとうと礼を言っておくよ。それから俺の名前は――あれ？」

何でだ。名前を思い出せない。俺は日本人で、ただの営業マンで、それで……

名前が出てこない。ファンタジーな世界に飛ばされたショックで記憶喪失になったとでも言うのか？ 何か名前のわかる物を持ってなかったっけ？

「どうしたんだい？」

「まさか、そこまで……」

そう思って取り出したのは先ほどの黒革の二つ折り財布。免許書がきちんと入っていることに安堵してため息をついた。イケメンとは言えない自分の写真を見て落ち着くなんてどうかしている。年下の子の前で取り乱すなんて情けないところをこれ以上見せたくない、気持ちを切り替える。

「ごめんごめん、ボーっとしてた。俺の名前はユウイチ・アマギだ。歳は24で営業マンって言ってもわかんないか、商人をしてた。正直色々迷惑をかけることになると思うけどよろしく頼む。君らより年上だと思うけど気軽にユウって呼んでくれ」

日本人だとか、ここはどこだとか、色々言いたいことや、聞いたことはあった。約1名を除いて、目の前の少女たちはおそらく良い子だろう。それに勘でしかないが馬鹿でもない気がする。自分が異端である可能性を鑑みて、様子を見ながら対応しようと思った。何しろ森の中でスーツ姿なのだ。現代日本でも随分おかしい。異世界なら尚更だ。

「ユウ、よろしくな」

「ウチらより8つも上だったんね。同じ位と思ったばい」

「料理とか家事全般は得意だから任せてくれよ」

胸を張って答えるが、実際は胸を張れたものではない。学生時代から6年間1人暮らしを続けたために生活力を上げざるを得なかったのだ。

「ミイフェリア・モルト、ミイでよかよ。狩人ばってん戦いより木の実探しとかの方が得意だね、食糧探しが主な仕事ばい。色々教えるけん手伝ってね、ユウさん」

次に隣に座っている猫耳少女が話しかける。日本語で通じていること自体驚きだが、ありがちな通訳魔法かなんかのおかげか、日本語が公用語化しているのかが気になった。

それにしてもこの少女の訛りに親近感を感じる。そして実際に2人の距離は近い。同じ丸太に腰掛けているが、肩と肩との距離は手のひら1枚分しかない。異性への、いやそれ以前に未知の存在に対する、警戒心はないのだろうか。実際暴漢から助けてくれた恩もあるし、果実を取ってきてくれたのも彼女。3人の美少女がいるが、現時点では彼女への高感度がダントツだ。この胸の高鳴りは決して猫耳フェチだからではない。

「お、おう」

少し上ずってしまった。「緊張せんでよかよ」とミイはユウの膝を叩きながら笑うが、向かい側の金髪の少女は冷めた目をして鼻で笑っていた。そんなに恨まれるようなことをしたのだろうか。

「フォンタイル連合アンザイネス出身のアンナ・ソルティーだ。今年で16だからずっと年下だけど気軽にアンナって呼んでくれよ。ギルド登録では一応、竜騎士ってことになってる」

「エリス。登録上は格闘家よ。2人とは同じアカデミーの同級生で卒業後そのまま同じパーティを組んでるわ。担当は私たちを狙う愚かな野党や魔獣どもを殲滅することね」

「あたしと一緒に前衛さ」

赤い髪 of 角の生えた少女、アンナは竜騎士というからには竜の一族か何かのようだった。その隣 of 金髪のエリスという少女は見たところ普通の人間と変わらなそうであったが、若干耳が長いことからエルフに相当する種族のようだと見当を付ける。関節技でさえあの威力、魔法か何かを使えばもっと強いのもかもしれないと考えると背筋に悪寒が走った。それにあの猛毒から回復して、普通に動いているようにしか思えない。彼女の機嫌だけは損ねないようにしようと誓うユウ。おそらくアンナに向ける熱の籠った視線からして彼女が

エリスにとっての地雷のような気がする。

「竜騎士に格闘家か。カッコいい響きだな。やっぱりいろんなクエストこなしながら旅しているってところなのか？」

「いや、あたし達はクエストは金に困ったときとか偶々ってときしか受けてない。結構不真面目な冒険者かもな」

「なら普段どうやって生計立ててるんだ？」

「一応、って言っただろ？ 本職は旅の料理人、世界中の美味しい素材を探して、それで美味しいレシピを作って出版するのがあたし達の仕事だよ」

「すげえな。グルメハンターってところか？」

一度は料理人を志していたユウにとっては、自分のやりたいことをやっている彼女たちを少し羨んだ。アンの補足をするようにエリスは続ける。

「似たようなものだけど少し違うわ。自分の舌を満たすための彼らと違って、私たちは他人に提供するのが仕事。まだ旅を初めて1年くらいだけど、普通の料理に飽きた大富豪や美食家たちがレシピ集を買ってくれているわ。スポンサーとしての援助してくれる人もいるから冒険者としては生活水準高いと思うわよ」

「へえーそれは凄いな」

自慢げな様子で腕を組むエリスだったが、これがゲームの中のような世界観ならスポンサー付きの旅なんてできるパーティは随分と恵まれた存在だろう。余程の凄腕でない限りその日暮らしのイメージがユウの中にはあった。そして実際そのようで、

「ギルドではイロモノパーティ扱いばってんね」

「ひたすらリングを探しているだけだもんな」

頭を掻きながら恥ずかしそうに照れる2人と「別にいいじゃない。私たちは私たちで」と突っ込むエリス。そのやり取りにユウは顔をしかめる。

「えっ、リンゴってそんなに珍しいのか？」

「知ってるのかよ！？ リンゴって果物のことだぞ」

「知ってるも何も、俺のいた所では日常的に口する果物だぞ。こんな形な」

適当な足元の枝を拾い地面にリンゴの落書きを書く。

「この位の大きさで、赤い梨みたいな果物だけどアンナが考えてるのと同じか？」

「うん。“死ぬほど甘くて美味しい、赤い梨みたいな果物”って聞いている」

「まあリンゴは甘くて美味しいよな」

「リンゴって実在していたの！？」

意外にも喰いついてきたのは冷静なキャラだったと思っていたエリスだった。まずい。もしかしたらリンゴは未開の大陸やら秘境に存在しているのか、またはこの世界にはリンゴがないのかもしれない。どこから彼女たちがリンゴのことを知ったのかはさておき――

「ああ。腐るほどたくさんあるぞ」

3人の眼の色が変わる。それほどにここではリンゴは貴重な存在らしい。

「それじゃあ今後の方針は決まりね。ユウ、アンタのいた国へ向かうわよ。どうしても今のあたしにはリングが必要なの」

今までの強気な口調の裏側にどこか悲痛ともとれる感情が見え隠れする。その気持ちを利用するようで悪いが背に腹は代えられない。今の自分には身を守る術や生計を立てる術は愚か、この世界で生きていくのに必要な最低限の知識さえない。ならば

「ただ俺のいた国に戻る術がなあ、ないんだよ。どうも俺最近の記憶がなくなっって何でここにいるのかも分かんないんだ」

ゴメンと心の中で呟きながら言ってみる。やましい意図はあるが、この世界のことすら知らない今、帰還する術がないことと、いくつかの記憶の欠落は決して嘘ではない。

「大丈夫だって。あたし達がユウを国まで送り届けてやるからさ。野党も魔獣だってへっちゃらさ」

「それでユウさんの出身はどこね？」

「ゴメン。それも忘れちゃった」

このときユウは異世界の日本だという事実をとりあえず誤魔化したつもりであったが、昨晩の悲劇を知る3人の少女たちにとってその言葉の持つ意味は重かった。

自分たちの【暗黒料理】でリングを得るための最重要なヒントを

失ってしまったことと勘違いしたからだ。

第4話 リンゴを巡って（後書き）

ここでの美食家とは、もちろん悪食家の間違いです。

前話での朝食が果実だったのは耐性のないユウに対しての配慮でした。

年下の美少女3人に囲まれる旅は一見幸せなハーレムっぽいですが、全然違うのでそっち方面の期待しないでくださいね。あくまで【悪運】に恵まれた主人公です。

第5話 血濡れの契約

「だったらまずはユウの記憶を戻せばいいんだろ？　だったら記憶を戻すアイテムや魔法を探せばいいじゃんか」

沈黙を破ったのはムードメーカーのようであるアンナだった。

「そうたい。それがよかよ。魔人の多いガザツタ帝国か、魔法の発達しているモールド帝国あたりを目指したら？」

「そうね。それがいいわ。流石私のアンナ。というわけでアンタには嫌でも私たちに付いて来てもらうわよ。待遇はアンタの命の安全と1日3回の食事。それでいいわね」

やはり魔法があるのか。実在するかはともかく元の世界に帰還する術を探すにはちょうど良さそうだな。もし帰還する術が本当にあったとしたらどうかして彼女たちにリングを届ける術もついでに探せば裏切りではないよな。

この世界で初めて出会った少女たち、ここでのやり取り一つでおそらく今後の生活、いや命そのものが左右される。ユウは思考を慎重に巡らせる。

それに一文無しかつ身元不明の俺を必要としてくれる人たちがいるのはありがたい。彼女たちはそれなりに旅慣れている実力者だろうから、ファンタジーな世界に投げ出された一般人の俺にとっては情けなくても守ってもらえるのは最高の待遇条件だな。

あまり迷うことなく決断した。

「ああ。色々常識に欠ける部分もあるし、役に立てることは少ないけどできることがあったら頑張るからよろしく頼む」

笑顔で握手をしようと手を差し出したユウだったが、当のエリスはなぜか立ち上がってファイティングポーズをとった。そして右の口角を釣り上げ、不敵な笑みを浮かべた。

「——————契約成立ね。アンナ行くわよ」

「オッケー！ エリス」

「ゴメン、結構大きかね。罨抜けて来たみたい。任せるばい」

右隣のミイが声を震わせながら呟く。そして彼女はユウの手を握ったと同時に前へ引っ張り出し、槍を構えたアンナと素手のエリスがその両脇をすり抜け突進する。

「ぐうおおおおおおおお」

獣の咆哮が聞こえたが、ユウはミイによって共に地面に伏せさせられていたため、獣に襲われていることしか把握できない。巨体によって揺れる地面と落ちて来る葉っぱや踏み荒らされる枝の音、だんだんか細くなる獣の声だけが得られる情報源だ。本当に情けないと我ながら思う。が、善戦しているだろうことはミイの表情からも察することができたため安堵もしていた。

「エリス！ 今だ！！」

「プリンセス ヘッドロック!!!」

漫画であるようなボキッつというような効果音は聞こえなかったが、哀れな獣の頭蓋骨が砕ける音はもつと悲痛な低音だった。断末魔さえあげずにその命を散らしたようだ。

「イキの良いうちに血を抜かんとね」

そう言つてミイは立ちあがり獣の方に向かった。ユウも立ち上がつて振り返り状況を把握する。脳漿を散らした黒い獣、おそらく熊の一種がうつ伏せに倒れていた。ゆうに2mを超える巨体だ。その四肢と胴体はアンナの槍で穿たれたであろう穴だらけであり無残な姿である。

一方アンナとエリスはほぼ無傷のようであつたがその姿は返り血で塗れている。先ほどの叫び声からして止めを刺したと思われるエリスの全身は血だけでなく脳漿に塗れている。

大学時代の地鶏店での数奇なバイト経験がなければユウはこの光景に耐えられなかったであろう。店の裏小屋に飼っている鶏を絞めるところから、羽を筆ったり、骨に沿って肉を削ぎ切る工程など全てを2年半の間体験してきた。なので大抵のグロは耐えられると思つていたが、それでもこの凄惨な光景を目の当たりにして、アンナやエリスを気遣う精神の余力はなかった。盛大に嘔吐することはなくとも、口内に酸っぱく突き刺さる感覚からは逃れられなかった。

そしてミイが獣に近づくと腰から鉋を抜く。その瞳は可愛い子猫のものではなく、瞳孔は細くなってトラのような肉食獣の輝きを放つていた。そしてうつ伏せに倒れた獲物に向かって逆手に持った鉋を両手で振り上げ、その一刀で頸動脈を切り裂いた。

噴水のように足元の巨体から血が噴き出し、彼女の白銀の髪と白い肌が鮮やかな赤に染まっていく。マントのおかげで服はほとんど無事だろうがそれでも血濡れの少女3人に驚愕するユウ。

何が戦闘は苦手だよ。ミイ。お前も慣れ過ぎだろ。

「毒が抜けきってないとはいえ、朝の運動にもならなかったわね」

両手を上げて物足らなそうに真伸びをしているエリス。彼女は「やれやれ」と、荷物の入ったカバンのところまで戻り、木綿の手ぬぐいのようなものをミイに手渡すと。2人は血を拭いに水場まで向かったようだ。

一方、あまり返り血を浴びていないアンナといえば、血の海から離れたところの地面に槍の切っ先で地面に直径5mほどの円をベースにした複雑な魔法陣を描いている。何かの儀式をするのだろうか、その様子はあまりにも怪しい。

予想の遙か斜め上の彼女たちの強さと逞しさに素直に喜べないユウは思う。

嵌められたのは俺の方かもしれないな。

第5話 血濡れの契約 (後書き)

えっ戦闘シーン？

まだ主人公が戦闘に参加できる状態ではないので、凄惨さだけを描写してみました。だって本当に一般人レベルですから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5735x/>

リンゴを求めて

2011年11月14日21時15分発行